

「教育学関連学会共同シンポジウム」提案要旨

近年、教育学研究の多様化・分散化が著しく進み、学術会議に登録された分だけで120をゆうに超える教育学関連の専門学会が分立していると聞くようになりました。こうした事態は、産業構造や社会生活の高度化、あるいは国際関係の緊密化にともなって、教育の果たすべき役割の重要性が増し、教育問題がますます広域化・複合化していることを反映するものであって、ある意味で不可避の趨勢といえるかもしれません。しかしながら、このことが教育学という本来ひとつのディシプリンのもとに括られてきた研究分野が分解に向かい、研究者相互の意思疎通について困難な状況をもたらしているとするれば、教育学の将来にとって深刻な問題であるといわざるをえません。

明治期の近代化とともに始まったわが国の教育学研究は、帝国大学や高等師範学校ごとにおかれた研究組織を中心に進められ、全国の教育学者を糾合する学会組織である日本教育学会が誕生したのは、政府による文化の統制政策が強まった戦時期のことでした。敗戦後アメリカの教育研究の影響を受けた教育社会学会が教育学関連学会としてはじめて独自の専門学会として誕生しましたが、数年後に教育哲学会と教育史学会が設立され、教育学の研究活動がそれぞれに専門分化していく道すじができてきました。しかし、当初こうした専門学会を担った人びとは、もともとは教育学というディシプリンのもとに学問訓練を受けてきたこともあって、共通の学問的基盤を自明の前提としてもっていたように思われます。

当時と比較したとき、今日の教育研究の際立った特徴はその学際的性格が強まって、隣接科学との関係が強化されたことにあるように思います。現実の課題に応えうるような教育研究には、教育学という狭い枠を超えて、他の学問分野との連携なしに質的な向上が見込めないことはいまでもありません。しかし、教育学が教育という歴史的・社会的な営みを対象とする学問であるかぎり、このことを軸に多様化する教育研究を共通の土俵につなぎとめる学問的努力もまた欠かせないと考えます。それは教育学をめぐる制度をいじることによって解決できるようなものではありません。教育という事象をどのように概念的に把握するかという試みと、いかにして教育学がひとつの学問的分野として成立しうるかという問いとを、自覚的に問い続けることがいまこそ求められているように思えます。

前置きが長くなりましたが、教育学関連の専門学会がこれまで積み重ねてきたそれぞれの学問的蓄積と独自の存在意義をお互いに承認したうえで、なお教育学がさまざまなサブ・ディシプリンを統合するひとつの学問的分野として存在することの意義をあらためて議論することが必要なのではないのでしょうか。そのために日本教育学会が中心となって、いくつかの教育学関連の専門学会に呼びかけて、教育学のあり方をめぐってシンポジウムを開催したらどうかと考え、提案させていただく次第です。共通のテーマをそれぞれの学会を代表する論者の中で討議することは、多様な問題関心や方法論的関心をもつ教育学研究者の間での生産的な議論を可能にする土俵づくりのきっかけになることが期待されるだけでなく、シンポジウムのあとに自由な懇談の場を設けることで、これまで出会う機会の少なかった研究者同士のface to faceの人間関係をつくる場を提供することにもなるかと思えます。

貴学会でご審議いただいて、シンポジウムを実現する方向でご尽力いただけますようお願い申し上げます。

2012年1月28日

日本教育学会会長 藤田英典先生

教育哲学会代表理事 森田尚人